

## 「ブータン王国でのボランティア耳科手術」を企画・開催して

仙台・中耳サージセンター 湯浅 涼

### 1. はじめに

東日本大震災の8カ月後に、当時は馴染みの少なかった国、ブータン王国から第5代ワンチュク国王・王妃が数名の僧侶を従えて福島県の被災地を訪れ、犠牲者に祈りを捧げたことがTVで大きく報じられた。日本・ブータンとの国交樹立25周年を記念して、国王と王妃は国賓として来日された。お二人は真先に、巨大津波で壊滅的被害を受け、さらに原発事故による放射能被害を受けている福島県原釜の海水浴場に立ち寄り、同伴の僧侶らとともに、犠牲者に祈りを捧げられた姿に感動した。また、大震災直後にはブータン国内で皇室をはじめ、多くの国民が大震災に見舞われた日本に対して祈りを捧げたことを知らされ、更に深い感動を覚えた。

ブータン王国はヒマラヤ山脈を北に望み、中国、インドに囲まれた九州と同じ位の面積の小国である。日本との交流は1964年、国際協力機構(JICA)から派遣された西岡京治技師がブータンで稲作をはじめ農業技術の指導に貢献し、極めて高い評価を受けている。1980年、西岡氏は国王から「ダショー」という最高の称号を与えられ、その功績が国民に浸透して、現在まで日本に対する強い絆で結ばれている。

### 2. ブータンにおける耳鼻咽喉科医療状況

ブータン王国における医療事情は日本とは大きな格差があり、耳鼻科医は全国に3名のみで、すべて首都ティンブーの国立病院勤務医で、30年前のタイ国における医療事情に似ている。1987年と1990年、私はタイ僻地耳科手術キャンプに参加したことを思い出し、耳漏・難聴で悩むブータン国民に耳科手術を行い、東日本大震災へのお見舞いに少しでも恩返しが出来ないものかと、2012年6月、首都の国立病院JDWNRHを訪れ、保健省のトップならびに病院長と面談した際に、我々のブータンでの耳科手術ボランティア活動を強く要望された。

### 3. 第一回事業

そして2013年4月末からのGWに、兵庫医大から桂 弘和先生、北大から栢谷将偉先生、東北文化学園大学教授松谷幸子先生(前仙台日赤病院耳鼻科部長)、それに私の耳鼻咽喉科医師4名と当院の看護師長の5名で第1回の本事業を無事終了した。私が1988年に開発した「フィブリン糊を用いた接着法」を主体とした鼓膜・鼓室形成術が4日間で慢性中耳炎患者22名(27耳)に対して行われた。このボランティア医療活動についてブータンの有力紙の朝刊に記載された。

1カ月後に現地から、27件のうち24件(89%)が「術後の経過は満足すべきものであった」との報告を受け安心した。そして、本年10月中旬に第二回事業を是非企画して欲しいとの要請を受け、その事業の計画を進めた。

### 4. 第二回事業

2013年10月13日～19日、前回同様、首都ティンブーの病院で第二回事業が行われた。チーム構成は大阪から山本悦生先生、新潟大から山本 裕先生、仙台から私と湯浅 有の4名に当院の看護師2名の計6名であった。

初回の事業での反省点であった「術当日に患側と耳の状態が不明」という指摘に対して、トリアージ方式を採用した。すなわち、手術前日に私が選別された術患を診察して、病変の程度と左右を明示するために、色違いの腕輪を患耳と同側の腕に装着して解決した。

手術は前回同様、一室に2台の手術台と顕微鏡をセットして、2列同時進行し、3日間で25耳の手術を終えた。今回は当院から寄贈した顕微鏡Zeiss OPM-111が間に合い、初回より手術環境は整い、山本組と湯浅組でスムーズに進行した。我々は交代で行ったが、看護師は休み無しに介助して頂き、また、初めての術者相手の器械出しもあり苦勞をかけ、今後の課題となった。

これまでの2回のボランティア耳科手術の活動が地元マスコミにも取り上げられ、有力紙KUENSELにそれぞれ、本事業が全面に掲載された。

本年は第三回事業として、8月末か9月初めに、同じくJDWNRHに他大学からの2名の参加者を交えて行う予定である。

### 5. おわりに

本事業は途上国の医療にどれほどの貢献になるかは疑問であるが、30年前にタイ国で展開された「タイ僻地耳科手術キャンプ」が20年間継続した結果、現在ではその必要が無くなるまでの結果を得ている。その点からも、本事業を継続することの重要性を痛感し、そのための運営資金の調達も重要課題である。現在、参加者の渡航・滞在費用を全額事業資金で賄ってきたが、今後も参加者への資金援助を持続していきたいと考えている。現時点の財源は当院を含め、本活動に賛同する個人ならびに団体からSPIOへの寄附金が大部分であり、製薬・医療器械業界からの寄附に頼らないで運用されている。この方針は途上国での医療ボランティア活動を行うための基本姿勢と考えているが、そのための資金調達がこれからの重要課題である。そのために、今後本事業に賛同される方々のご支援を紙面をお借りしてお願いする次第であります。

今後、数年間は本事業を継続し、全国の耳科手術の専門医に参加して頂き、一粒の種が芽を吹き、成長していくことを願っている。



第一回事業でのJDWNRHの手術風景



ブータンの有力紙「KUENSEL」の記事